

鳥追

一名 鳥追船

金剛弥五郎作

季は	地は	男	シテ
秋	薩摩	左近尉	日暮の妻
		子方	日暮の子花若

ワキ 日暮の何がし

トモ 日暮の従者

「かやうに候ふ者は。九州薩摩の国日暮殿の御内に。

左近尉と申す者にて候。さても此日暮の里と申すは。前には大河流れ。末は湖水につゞけり。此湖より村鳥あがつて。浦向ひの田を食み候ふ間。毎年鳥追船をかざり。田づらの鳥を追はせ候。又頼み奉る日暮殿は。御訴訟の事あるにより。御在京にて候ふが。其御留守に北の御方と。花若殿と申す幼き人の御座候。あまりに鳥追はせうする者も尉が参りて候。

シテ「左近尉とは何の為めに唯今來り給ふぞ。

シテ「さん候ふ殿は此秋の頃御下向あるべき由申し候。「如何に花若がうれしう候ふらん。

男「又唯今参る事余の儀にあらず。当年某が船に。更に鳥追はせうする者なく候へば。花若殿御出であ

つて鳥を追うて御遊び候へかし。左様の事申さん
為めに参りて候。

シテ
「何と花若に田づらの鳥を追へと申すか。花若是い
とけなけれども。左近尉が為めには主にてはなき
か。主に鳥追へなど、申すは。かかる左近尉ほど
情なき者こそなけれ。

男
「何と左近尉は情なき者と仰せ候ふか。まづ御心を
静めて聞し召され候へ。人の御留守など、申すは。

五十日百日。乃至一年半年をこそ御留守とは申せ。
既に十箇年に余り。扶持し申したる左近尉が情な
き者にて候ふか。所詮詞多き者は品少なしにて候
ふ程に。花若殿御出であつて鳥御追ひなくは。此
屋をあけて何方へも御出で候へ。

シテ
「實にく申す処理にて候。花若が事はいとけなく
候へば。みづから出で、鳥を追ひ候ふべし。

男
「それこそ思ひもよらぬ事にて候へ。花若殿の御事

はいとけなき御事にて御座候へば。苦しからざる
御事にて候。上膳の御身にて御出であるべきなど、
仰せ候ふは。某が名を御立て候はんずる為めに仰
せ候ふか。

シテ
「さらば花若一人は心もとなく候へば。二人ともに
立ち出で鳥を追ひ候ふべし。

男
「それはともかくも御はからひにて候ふべし。さら
ば明日舟を浮べて待ち申さうするにて候。

シテサシ
「實にや花若ほど果報なき者よもあらじ。さしもい
はひて月の春の。花若とかしづくかひもなく。お
ちぶれはてゝあさましや。

下歌地

「賤が鳴子田引き連れて。鳥追船に乗らんとて。

上歌

「ともに涙の露しげき。く。稻葉の鳥を立てんと
て。人も訪はざる柴の戸を。親子ともなひ立ちい
づる。く。
(中入)

「秋もうからぬ故郷に。く。帰る心ぞうれしき。

ワキ次第

詞

「これは九州日暮の何某にて候。さても某自訴の事
あるにより。十箇年に余り在京仕り候ふ処に。自
訴悉く安堵し喜悦の眉を開き。唯今本国にまかり
下り候。如何に誰がある。

トモ
「御前に候。

ワキ
「あなたに当つて笛鼓の音の聞え候ふは。何事にて
有るぞ尋ねて來り候へ。

トモ
「畏つて候ふ。

ワキ
「實にくさる事あり。九州にては此鳥追舟こそ一
つの見事にて候へ。此舟を待ちて見ばやと存じ候。

男サシ
「面白や昨日の早苗いつの間に。稻葉もそよぐ秋風
に。田面の鳥を追ふとかや。

シテ子
「我等は心浮鳥の。下安からぬ思ひの数。

ワキ
「群れるる鳥を立てんとて。身を捨舟に羯鼓を打
ち。

シテ子
「或は水田に庵を作り。

シテ
「又は小舟に鳴子をかけ。

三人一声
「引きつるゝ。湊の舟の落汐に。

地
「浮き立つ鳥や騒ぐらん。

シテ
「鳥も驚く夢の世に。

地
「我等が業こそ現なき。

地
「實にや夢の世の。何かたとへにならざらん。く。

シテサシ
の鳥の風情や。此頃は。なほ秋雨の晴間なき。水
陰草に舟よせて。我等も年に一夜妻。逢ひもやす
ると天の川。うはの空なる頼みかな。く。

シテサシ
「さるにても殿は此秋の頃。下り給ふべきなどゝ申
しつれども。それもはや言葉のみにて打ち過ぎぬ
れば。後々とても頼みなし。たゞ花若が果報のな
きこそうたてし候へ。

子
「實にや落花心あり人心なし。たとひ父こそ訴訟の

習ひ。此方の事思ひながら。永々在京し給ふとも。左近尉情ある者ならば。自らが名をも朽たし。母御に思ひをかけ申す事よもあらじ。あはれ父御に此恨みを。語り申し候はゞや。

シテ「たとひ訴訟はかなはずとも。父諸共に添ふならば。かくあさましき事よもあらじ。

地「いつまでか。かゝる憂き目を水鳥の。はかなく袖をぬらすべき。

男詞「是はさて何事を御歎き候ふぞ。歎くことあらば我屋に帰りて御歎き候へ。御覧候へ余の田の鳥は皆立ちて候ふが。左近尉が田の鳥はいまだ立たず候。何の為め雇ひ申して候ふぞ。

子「悲しやな家人にだにも恐るれば。身の果さらに白露の。

シテ「晚稻の小田も刈りしほに。色づく秋の村鳥を。

子「苧生の浦舟漕ぎ連れて。

シテ
「思ひくの囃子物。

子
「あれく見よや。

シテ
「よその舟にも。

地
「打つ鼓。く。空に鳴子の村雀。追ふ声を立て添へさて。いつも太鼓はとうくと。風の打つや夕波の。花若よ悲しくとも。追へやく水鳥。いとせめて。恋しき時はうば玉の。夜の衣をうちかへし。夢にも見るやとて。まどろめばよしなや。夜

寒の砧打つとかや。

シテ
「恨みは日々にまされども。

地
「恨みは日々にまされども。あはれとだにもいふ人の。涙の数そへて。思ひ乱れて我心。しどろもどろに鳴る鼓の。筋なき拍子とも。人や聞くらん恥かしや。

シテ
「家を離れて三五の月の。

地
「隈なき影とても。待ち恨みとことはに。心の闇は

まだ晴れず。

シテ
「すはく 村鳥の。

地
「すはく 村鳥の。 稲葉の雲に立ち去りぬ。 又いつ
か逢坂の。 木綿附鳥か別れの声。 鼓太鼓うちつれ
て。 猶もいざや追はうよ。

男
「あらうれしや今こそ某が田の鳥は皆立つて候へ。
先々御休み候へ。

ワキ詞
「鳥追舟に詠め入りて。 故郷に帰るべき事を忘れて

候。 舟ども多き中に。 竇鼓と鳴子をかざりたる
舟おもしろう候。 此舟を近づけ見ばやと存じ候。
如何にあれに竇鼓鳴子かざりたる舟を近う寄せ
よ。

男
「あら不思議や。 此あたりに於て。 左近尉が舟あれ

よせよなどゝいはうする者こそ思ひもよらね。 こ
れは旅人にてありげに候。 天晴存外なる者かな。
ワキ
「あの舟よせよとこそ。

男

「是は中々不審なりとて。漕ぎ浮べたる鳥追舟。さし近づけてよくく見れば。是は日暮殿にて御座候ふか。

ワキ 「あらめづらしや左近尉。あれなるは汝が子にて有るか。

子 「いや是は日暮殿の子にて候。

ワキ 「さてあれなるは汝が母か。

子 「さん候母御にて御入り候。

ワキ 「それは何とて賤しき業をばいたすぞ。

子 「父は在京とて。また音信も候はず。頼みたる左近尉。此秋の田の村鳥を追へ。さなくは親子もろともに。我屋の住居かなふまじと。いふ言の葉の恐ろしさに。身を捨舟に羯鼓を打ち。ならばぬ業を汐干の浪。あさましき身となりて候。

「言語道断の事。夫れ弓取の子は胎内にてねぎことを聞き。七歳にて親の敵を討つとこそ見えたれ。

況んや汝十歳にあまり。さこそ無念に有りつらん
な。唯是と申すも某が永々在京の故なれば。一し
ほ面目なうこそ候へ。唯今左近尉を討つて捨てう
するにあるぞ。此方へ來り候へ。如何に左近尉。
おのれは不得心なる者かな。汝をめのとに付け置
く上は。さこそ煩ひも有りつらん。如何さま国に
下るならば。如何やうなる恩賞をもなどゝ。都に
てあらましのかひもなく。結句主を追つ下げて。
下人に使ふべき謂ばしあるか。何とて物をば言は
ぬぞ。

シテ
「めのとの科もさむらはず。唯久々に捨ておきたる。
花若が父の科ぞとよ。あやまつて仙家に入りて。
半日の客たりといへども。故郷に帰つてわづかに。
七世の孫にあへるとこそ。承りて候へとよ。況ん
や十余年の月日ありくて。今日しもかかる憂き
業を。見見え申すは不祥なり。

地「たゞ願はくは此程の。恨みを我等申すまじ。左近

尉が身の科を。親子に免しあはしませ。

ワキ「此上は。否とはいかゞ稻庭の。

地「小田守も秋過ぎぬ。はやくゆるす左近尉。

地「さて其後に彼人は。く。家を花若つぎざくら。

若木の里に隠れなき。五常たゞしき弓取の。末こ

そ久しうかりけれ。く。